
仮面ライダーディルティ ~世界の断罪者~

ハイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディールティ〜世界の断罪者〜

【Nコード】

N7478K

【作者名】

ハイド

【あらすじ】

これはディケイドやディエンドとは違う別の通りすがりの仮面ライダーの物語……。独裁者が圧政を敷く荒廃した世界に1人の仮面ライダーとその助手が降り立つ。その名は裁木罪斗さきみ つとむまたの名を『世界の断罪者』仮面ライダーディールティ

(前書き)

初短編です。ちよいとグダグダな感じですが、見ていってください。
それでは始まりませう。

これは、門矢士ことデイケイドや海東大樹ことデイエンドとは違う、もう一人の通りすがりの仮面ライダーの物語……。

とある世界に銀のオーロラが現れ、そこから二人の男女が出てくる。男の方は、紺色のスーツを着流したファッション、黒の髪の毛に黄緑のメッシュがかかったロングヘア、中性的な、否、どっちかという女性的な顔立ち。なんといつてもその男の印象を決定づけるものは開いているのかどうかさえわからないキツネ目と胸ポケットにある裁判などで裁判長が使う木槌を小型化したようなものであった。女の方は同じ紺色のスーツを着ているがこっちはキツチリしており、茶色のセミロング、眼鏡をかけている。

「着きましたよ、罪斗」
と女性が男性、裁木罪斗さきばきつみとに向かって言う。

「ええ、そのようですね、ミリヤ。ここが目的の別世界ですか……」
とあたりを見回しながら罪斗はぼやく。だが、目の前には現代風景の街並みがあり、まったくと言っていいほど賑やかである。これと言ったゴロツキがうようよしているわけでもない。

「とりあえずこの世界を一通りあるいて僕達がこの世界で裁くべき罪を探さねばなりませんね。行きましよう、ミリヤ」
そう言つて、この世界を探索する罪斗。はい、と二つ返事でミリヤもついていく。

数十分後……

とある、喫茶店で罪斗達は休憩していた。

「手がかりありませんね、罪斗。もしかしたら来る世界間違えたんじゃないですか？」

とミリヤがぼやく。何故なら、この世界で事件と言う事件は全く起

こらず、まったく平和だからである。だが、罪斗は納得していないようだ。

「ですが、僕達がこの世界に来たのはこの世界に何らかの『罪』がはびこっているという証ではないでしょうか。ところで……、この男」

と罪斗は一枚のポスターを手に取る。それには中年太りの太ったいかにも悪人面の男が笑顔で写っており、『欲張内閣はよりよい暮らしを皆様にお届けいたします』と書かれている。それを手に取り罪斗は続ける。

「えーっと……名前は『欲張強造』^{うけはるひさひさ}。この世界で総理大臣をやっている方ですね。この男には『罪』の匂いがプンプンします」

「そうですか？ってというか罪斗。あなた、人を見かけで判断してません？まさかいくら悪人面とはいえ、彼が世界の『罪』な訳が……

と半眼で罪斗を見るミリヤ。

「はたしてそうでしょうか？この喫茶店に来る前、町中にこのポスターが異様に多かったのは気づきませんでしたか？」

罪斗の言葉にミリヤはハツとする。確かに探索している最中、このポスターが多く張られていた。しかも、この中央にあった公園には、欲張の銅像があったのである。

「ああ、確かに……、まるで北 鮮や旧ソ エトの金 正かレーンみたいな銅像がありましたね。ということはまさか？」

ミリヤの言葉に罪斗はうなずき、小声で話す。

「ええ、その通りです。おそらく……この世界の日本は彼が独裁しているのでしょうか」
「きゃあああああああああああああ
あああつ！」「悲鳴！？あそこは、貧民街のようですね。行ってみましょう。あ、ミリヤ勘定お願いします」

そう言うと罪斗は店を出る。

「あつ！待ってくださいよ。罪斗ー！」

とミリヤも店の勘定を払い、罪斗の後を追ったのであった。

貧民街

そこでは、役人らしき人物がオルフェノクやグロンギ、大シヨツカ
ーの怪人を引き連れて、1人の女性、三原夕紀みはら ゆきの家に押し掛けてい
た。家は無残に破壊され、オルフェノクの手には彼女の娘、千英が
いる。

「千英！」

「ママー！」

と千英は母である夕紀に駆け寄ろうとするが、オルフェノクに抑え
られ、身動きが取れない。

「この娘はお前が商売税、消費税、などで今まで滞納してきた税金
の肩代わりだ。返してほしければ税金、100億を払うんだな」
と役人は夕紀に言う。

「そんな・・・、100億だなんてそんな大金・・・」

と夕紀は法外な大金に絶句する。そこへ、

「何、簡単な話だぜ。俺らの経営する風俗で働けばいい。あんたは
美人だし、100億なんてちよろいもんだぜ」

グへへ・・・と笑いながらオルフェノクの1人が言う。夕紀はその
言葉を聞き、そこでやらされることを想像し、青ざめる。

「いやなら別にいいんだぜ。この娘はお前が税金を払わない限り、

一生俺達の奴隷なんだからなあ！ギャハハハハハハハハ！」

「まあ、今日決めるとは言わない。明日まで考えておくんだな」

そう言うと、役人達は千英を連れ、去って行った。1人、夕紀は泣
き続けていた。自分の無力を呪いながら・・・、そこへ、

「・・・遅かったようですね。そこのお人、どうかしましたか？」

と罪斗とミリヤが入れ違いに到着し、夕紀に問う。立ち話も何なの
で、夕紀は破壊された自宅を何とか整えながら、二人を招き入れる。
何故だか知らないが、この二人なら自分の話を聞いてくれそうだと
思ったからだ。

「なるほど・・・、娘さんを税金の肩代わりにされ、しかも、額は100億もの法外なる大金を支払う代わりに開放すると・・・」

「はい」

罪斗達と夕紀はお互いの自己紹介を済ませた後、夕紀はこの世界の状況を話した。やはり、罪斗の推理通りこの世界を滅びへと導く『罪』の元は欲張内閣のようだ。灰色の怪物、緑色の怪物ことオルフェノクやグロングリそして怪人達が役人のとりまきをやっている話を聞いたあたり、どうやら裏で大シヨツカーが糸を引いているようである。

（なるほど、道理で・・・『罪』の匂いはするのに、この世界にこれといった異変はなかったわけですか・・・）

と罪斗は胸中でうなずく。大シヨツカーは強大な組織、それがバツクについているのだから反逆しようとも返り討ちにされるのがオチであろう。そう・・・普通の人間ならば。

「大筋の所はわかりました。今から僕達は国会議事堂へといきます。多分そこなら欲張総理もいると思いますし・・・」

「え・・・それってどういうことですか」

と訳が分からず、夕紀は罪斗に聞く。

「娘さんを助けに行くんです」

罪斗の言葉に夕紀は驚きのあまり目を見開いた。この男は何と言った？娘を・・・千英を助けると言ったのか？そんなことをすれば、欲張内閣の反逆行為とみなされ、この男が殺される。なんとしてもそれを阻止せねば。そう思い、夕紀は罪斗に言う。

「そんな！無茶です！先程話したように欲張のバツクにはあの怪物どもが・・・大丈夫ですよ。だって僕らはこういうことは日常茶飯事ですから・・・」

夕紀の言葉を遮り、罪斗は微笑みを崩さず答え、ミリヤとともに夕紀の家を出て行った。その後ろ姿を見て夕紀は思う。

（もしかしたら・・・罪斗さんなら、娘を救ってくれるかもしれない・・・）

にすんじゃねえよ！俺の名は仮面ライダーディルティ。世界の『罪』を裁く者だ。地獄で覚えておきな！」

そう言つて、ディルティは、ディルティドライバーを乱射し、襲いかかるオルフェノクを2、3体射殺する。がその隙にグロンギが襲いかかる。だが、

ズバア！

それをディルティにかわされ、何かに真つ二つに斬られ絶命する。ディルティの手に握られていたのはディエンドドライバーのようなもののだが、銃形態ではなく、まるで剣のように変形しているではないか。

「俺のディルティドライバーは特別でね。さっきのグロンギみてーに近づくやつにはこういう風に剣に変形できるのよ！さあーて・・・楽しい塵掃除タイムと行こうじゃねえか！行くぜミリヤー！」

「はい、罪斗」

ディルティの言葉にうなずきミリヤはUSBメモリのようなものを取り出し、装着したベルトのスロットに装填する。

『サキュバス！』

ベルトの電子音と共にスーツがはじけ飛び、ボンテージドレスを身にまとい、彼女の頭に2本の捻じれた角が、背中には大きな蝙蝠の翼が現れる。その姿は伝承などで伝えられる淫魔サキュバスのようである。そう、ミリヤの持つUSBメモリもどき・・・ガイアメモリの持つ『淫魔』の記憶が生み出したサキュバス・ドーパンド（以下Sドーパンド）なのだ。

「教えてあげましょうか？楽しくて気持ちのいい遊びを」

妖しげな笑みを浮かべながら決め台詞を言うSドーパンド。

「さあて、楽しい処刑パーティと洒落込もうぜー！」

そう言つてディルティはカードを2枚ディルティドライバーに装填し、銃口を天に掲げる。

『アタックライドウ・・・ギガント、ケルベロス』

電子音と共に本来ならG3、G4の武装であるはずのガトリングガ

すとして・・・欲張氏には僕達とお話をしましょうか？」

デイルティはそう言いながらデイルティドライバーをソードモードにして役人と欲張につきつける。そこへ、

「ギベ！ギザムバ！」

と雄たけびが二人の背後から聞こえ、とつさに交わす。たまたま直線状に役人がいたため、哀れ、役人は謎の人物の攻撃を受け、絶命する。役人を殺したのはサソリ型のグロンギ、ゴ・スピオ・ダであった。

「欲張こいっを連れて行ってもらっては困る。大切な『資金源』なのでな別の方から声が聞こえ、デイルティは振り向く。そこには、シマウマ型のオルフェノク、ゼブラオルフェノクがいた。欲張は「先生！」と呼ぶ。

「デイルティだか何だか知らぬが、私が管轄する世界エリアで勝手な真似をされてもらっては困る。お前達二人には悪いが死んでもらう」
そう言って持っていた槍でデイルティに突きかかる。デイルティはドライバーソードモードで防いだ。だが、ゼブラオルフェノクの槍捌きはすさまじく、防戦一方となる。

「我が槍は風のごとし！もはや貴様は手足をもがれたアリと同じ。死ぬがよい！」

そう言ってデイルティの心臓めがけて音速の突きを放つ・・・だが、その一撃はデイルティの心臓を貫くことはできず空を切る。

「な！？」

「ちよつと速くてびっくりしたが、なんのこたあねえな。これならワームのクロックアップの方がまだませ」

そう言って、デイルティはゼブラオルフェノクを斬り裂く。そして、とどめを刺そうと剣を振りかぶるが、止める。

「やーめた。本当ならバツサリと痛みを感じさせず殺すべきなんだが、ちよいと鬨り殺しにしようと思しみに取っておいた役人えものを殺しやがったからな。やっぱこういう場合、御褒美をあげねーと・・・、最高の苦痛と恐怖をな」

そう言つてカードをディルティドライバーに装填し、トリガーを引く。

『ファイナルアタックライドウ・・・ディディディルティ!』
電子音と共に銃口から飛び出してきたのは・・・なんと、ギロチンであつた。ギロチンはそのまませブラオルフェノクの目の前に現れる。

「これが俺のFAR、『ディメンションパニッシュメント』。絞首刑や電気椅子、世界のありとあらゆる死刑の道具を呼び出すことができ、そして何よりもこいつの恐ろしい所は・・・」

ガシャン!とゼブラオルフェノクの両手に手錠がかかり、そのまま、断頭台に自分の意志とは関係なく体が動き、頭部が持つてこられる。
「な・・・体が勝手に!?!」

「こいつを発動しちまつたら、対象は自分の意志とは関係なく刑を執行されるつてこつた。お?ギロチンの刃がもう上がつてきてら」
ディルティの言うとおり、ギロチンの刃が勝手に持ち上がる。ゼブラオルフェノクは自分が何をされるのかを悟り、ひっ!と息をのむ。そして、

「や・・・やめろ!やめてくれ!おい、頼む!こいつを止めてくれ!」

とディルティに助けを求めるが、

「駄目だな。こうなつた以上、俺にも止められない」

と一蹴される。そして、無情にもギロチンの刃がゼブラオルフェノクの首に振り下ろされる。

ガアアアアアアアアン!

「痛ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」
残酷にもギロチンの刃は骨の部分で止まつており、それがゼブラオルフェノクに苦痛を与える。

「ありやあ?お宅の首が硬すぎてスッパリ行かなかつたかあ?ま、止めようにもあんたが死ぬまで止められねえからよ。諦めな。ヒヤハハッ!」

と突然の出来事に戸惑う欲張。すると、裁判長席からデイルティが姿を現す。

「ようこそ、俺の裁判所へ。ここは俺のイメージが生み出した、あなたの罪を裁く場所って所かな。お？弁護士やら検事、裁判員が来たみたいだぜ」

と銀のオーロラが裁判員席や、検察席、弁護士席に現れ、カブトやら、キバ、イクサなどの仮面ライダーの面々が現れる。

「さてと・・・それでは裁判を開廷しましょうか」

そして裁判が始まる。法廷ドラマのような激しい舌戦を繰り広げる。そして判決が下される。

「それでは、判決です。裁判員。欲張被告を有罪だと思っ方は席をお立ちください」

とデイルティは裁判員のライダーたちに席を立つよう促す。すると

・

「お婆ちゃんが言っていた・・・こいつは有罪だとな」

「こいつ、有罪でいいよね？答えは聞いてない」

「王の判決を言い渡す、有罪だ」etc・・・

とカブトや電王GF、サガなどのライダーたち全てが有罪に賛成のようである。

「わかりました。それでは主文、欲張強造は有罪・・・」

デイルティはうなずくと有罪判決を下し、仮面の奥でニヤリと笑みを浮かべ、残酷な刑を言い渡す。

「死刑に処する」

「!??ど・・・どうして・・・」

意外すぎる宣告に欲張の顔は青ざめる。

「『どうして?』だあ？裁判はするけど、無罪にしてやるなんざ一言言っただけ。自分を知らない。そんなオイシイ話があると思うか？え？テメエのような独裁者野郎によお!?ヒヤハハッ!」

「罪斗、欲張被告にはどんな処刑方法をするのですか?」

欲張を見下しながら笑うデイルティにSドーパンドが声をかける。

「おお、そうだったそうだった。あいつの様子だとぜんぜん反省してなさそうだし・・・こいつで行くかな」

そう言っただけでパチンと指を鳴らすと、銀のオーロラが現れ、その中から仮面ライダーアマゾンがやってくる。

「アマゾンの大切断滅多斬りの刑だ。独裁者野郎にふさわしい刑だぜ。それじゃあ・・・死刑執行」

「ケケケ！大切断！」

「や・・・やめろおおおおおおおおおおお！」

ディルティの掛け声とともに、アマゾンは飛び上がり、逃げようとする欲張の脳天にカッターのついた腕を振り下ろす。それを頭から受け、血を噴出しながら倒れる欲張にアマゾンは再び飛び上がり再び大切断を繰り返す。何度も何度も腕を振り上げるたびに飛び散る血液、肉片、骨片、内臓の欠片そして脳漿。

「よし、そこまででいいだろう」

とそういうと、アマゾンが欲張から離れる。もはや、欲張の体は原型をとどめておらず、死亡確定であった。

「以上で裁判を閉廷します」

そして、裁判室が元の総理室へと戻る。

「ふー、疲ました」

ため息をつきながらディルティとSドーパンドは罪斗とミリヤへと戻る。そして、何が起こったのか全然理解できない子供たちに向かって言う。

「もう大丈夫ですよ。僕達はあなた達を助けに来ました」

と罪斗はにっこりとやさしい笑顔で言う。

子供達を親の元へ帰した後、町に背を向け、罪斗達は歩く。

「さて、この世界の『罪』はもうなくなりましたし・・・次の世界に行きますか」

その後、町では、欲張が死んだことにより、人々は歓喜し、欲張の銅像をぶつ壊し、ポスターを破いた。そう、『罪』の元を断ったこ

とにより、この世界は再び活気を取り戻したのだ。

「ええ・・・そうですね、ところで罪斗」

「何でしょう？」

と顔を赤らめて切り出してくるミリヤに罪斗は振り向き言う。

「えっと・・・次の世界に行くのは明日にして今日はここに泊まっていますませんか？少しムラムラしちゃって、このままじゃ収まりがつかないので・・・」

罪斗は赤くなっているミリヤを見て、ああ・・・とミリヤの言いたいことを理解し、言う。

「いいですよ、僕でよければ。ただし、今夜は寝させませんからね」
そう言っつて、罪斗はミリヤの手を取りホテルへと向かった。

世界の『罪』を裁く『人に紳土的、悪には外道的に』がモットーの『世界の断罪者』裁木罪斗こと仮面ライダーディルティ。そして、彼のパートナー、ミリヤ。2人が次に行く『罪』が蔓延している世界はいったいどこなのか？それは誰にもわからない。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？ディルティの名前の由来は『罪』という意味の『guilty』（ギルティと読みます）からとりました。息抜きのつもりで書いたので、本来なら、すぐ終わるはずだったのですが結構、キャラの設定やら何やら考えていたら、結構時間食ってしまいました。まあ・・・仕方ないね。

それでは、また何処かでお会いしましょう。(owo)ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7478k/>

仮面ライダーディルティ ~世界の断罪者~

2010年10月21日23時49分発行